

藤川美代子著『水上に住まう——中国福建・連家船漁民の民族誌』、東京、風響社、2017年、490頁、6,000円＋税

鈴木 佑記

本書は、中国福建の連家船漁民を対象とした重厚な民族誌である。現代中国の約100年間を視野に入れ、国家の社会的周縁に位置づけられてきた彼らの日常生活の総体を、水上／陸上に住まうことの意味を問いながら描いている。連家船漁民とは、家族で船に住まう漁民を指す。著者は2007年の年始から連家船漁民と関係を持ち、それから2009年の夏にかけての2年半を現地で過ごし、また2009年秋以降も日本から断続的に調査地に赴きフィールドワークを行ってきた。

以下、本書の内容を章ごとに紹介する。その上で、ジェームズ・C・スコットによるゾミア論（スコット2013(2009)）を手がかりとして、連家船漁民と山地民を取り上げ、定住／移動と中心／周縁の二項対立的概念について若干の考察を加えたい。

序章では、調査対象地域の概況が説明されるほか、先行研究が批判的に検討される。著者は、これまでの水上居民（中国東南部の船上居住民）を対象とした研究では、調査対象者が認識する水上世界の論理が主題に掲げられることはなく、陸上世界の論理が先行して問いが立てられていたことを指摘する。その結果、「物言わぬ弱き被差別者」という水上居民像が固定化されてきた。そこで著者は、連家船漁民の視点に寄り添いながら、彼らの住まうという営みを日常実践の総体として捉えることを本書の目的に据えている。

第1章『「連家船漁民」とは誰か』では、連家船漁民と同じ地域に暮らす一般の漁民や農民、それに市街地の住人といった陸地を拠点とする人々が、「船上に住む」という生活形態の特徴をもって連家船漁民を名づけるのに対して、連家船漁民自身は「魚を捕る」という生業形態の特徴を重視して名乗りをあげている様子が説明されており、地域社会のなかで多くのずれを含みながら各主体が能動的に名づけと名乗りを行っていることを明らかにしている。

第2章「土地と家屋の歴史——集団化政策と陸上定居を経て」では、中華民国成立後に実施された集団化政策や定住化政策が、連家船漁民の住まい方と集団意識のあり方、そして陸上定住者との結びつき方を変容させてきた歴史を、連家船漁民による語りをもとに描いている。豊富な事例が提示されており、冒頭で著者が触れた「イーミックな視点」による対象社会の理解（p. 47）という方法が存分に発揮されている。

第3章「祭祀活動に見る連家船漁民の集団意識——共存する『宗族』・『角頭』・『大隊』」では、章題の副題にもある宗族（農民中心の父系出自集団）、角頭（根拠港を同一にする連



家船漁民間で築かれる父系出自集団)、大隊(集団化政策後に形成された行政組織)という三つの異なる帰属先を取り上げるなかで、祖先祭祀や神明祭祀の活動を通して、連家船漁民の集団意識が重層的・同時代的なものとして存在してきたと論じている。

第4章「連家船漁民の眼に映る陸上の人々との差異——葬送儀礼と『祖公』をめぐる理解」では、1960年代以降に生活の場を急速に水上から陸上へと移してきた連家船漁民ではあるが、依然として陸上定住民との間には差異が存在する事実を、葬送儀礼や祖先祭祀に着目して述べている。葬送儀礼においては遺体への積極的な関与、祖先祭祀においては族譜・位牌・墓碑の所持への無関心といった連家船漁民の特徴が挙げられている。連家船漁民の行動様式が陸上の人々への同化を目指すものではなく、彼らなりの方法や論理を重視しており、自分たちのやり方こそが優れていると主張しているのだと著者は説明する。

第5章「船に住まい続ける連家船漁民」では、改革解放後に陸上に家屋を持つ(借りる)ようになった連家船漁民が多数派になるなかで、今なお船での移動生活を続ける連家船漁民の家族を事例として取り上げ、彼らが水陸二つの空間を跨ぎながら生活圏を築いている状況を紹介している。連家船漁民は家屋獲得後、表面的には以前よりも生業の範囲が広がり、市場経済に深く参与するようになり、恒常的な家屋を身近なものとするようになった。しかし、陸上の人々との間に取り結ばれたネットワークが、水上で移動しながら「魚を捕る」生活を支えるという基本的な形態に変化はないとまとめている。

終章『『水上に住まう』ことが意味するもの』では、各章の議論を整理したうえで、連家船漁民にとって「住まう」行為とは、水上と陸上に境界を設けず、そのはざまを縫うように往来する日常実践の総体であると結論づけている。

以上が、本書の概要である。著者は冒頭において、「本書は、約100年にわたる現代中国を舞台に、連家船漁民の日常実践を見つめながら、水上に住まうことの意味を問う民族誌である。同時にこれは、国家の政策によりもたらされた住まう環境をめぐる大きな変化について、船の上で生きるマイノリティがいかに解釈し、いかに自分のものとしてきたのかを描く試み」(p. 18)であると述べているが、その試みは十分に達成されたと評者は考える。文化人類学者はややもすると共時的視点に重きを置きすぎて通時的視野が狭くなりがちであるが、著者はどちらにも目配りしながら全章を通して論述している。また、著者は「水上に住まう」ことに焦点を合わせているが、それを特別視することなく、「住」以外の暮らしの諸要素をも議論の射程に据えている。さらに、陸地との関係性にも注意を払いながら、連家船漁民の生活の全体像を彼らの視点に寄り添って描こうとしている。

評者が何よりも評価したいのは、著者が当事者の視点を終始大切にして対象社会を丁寧に論じている点である。このような研究姿勢は文化人類学者にとって至極当然のことではある。ところが、それが徹底されないために、これまで多くの研究者が陸地民中心主義的な枠組みをもとに船上居住民を論じてきた。著者は、先行研究でア prioriに設定されてきた漢族／非漢族という陸上世界で重視される枠組みからではなく、連家船漁民の日々の微細な生活営為をスタート地点として、水上で住まうことの意味を考究している。そのため本書によって、中国の船上居住民研究において、陸地民の視点を相対化することに大きく成功したといえる。

もちろん、これまでも何人かの研究者が陸地民の視点を相対化しようと努力してきた。そうではあるが、彼らの多くが前提としていたのは、「移動」から「定住」へとという一方向

的に進む船上居住民の住まい方であったり、陸地民が船上居住民を周縁化していくという力関係のあり方であったりした。ところが本書がいみじくも提示したのは、移動と定住の往還運動を常態にする生き方（以下、評者の造語として「仮住」と呼ぶことにする）」の視点であり、船上居住民自らが戦略的に社会の周縁に位置取る身のこなし方（以下、仮に「戦略的周縁化」と呼ぶことにする）だったのでなかろうか。

評者が本書のなかで見出した「仮住」と「戦略的周縁化」の二点は、ゾミア論に通ずるものがある。ゾミアとは、ビルマ、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナム、中国、インド、バングラデシュ 8カ国の国境を跨ぐ広大な丘陵地帯を指す。スコットは同地域を「避難地帯 (zones of refuge)」、「破片地帯 (shatter zones)」、「逃避地帯 (flight zones)」などと呼び、そこに住む山地民が移動と分散を繰り返し、主体的に周縁を生きることで国家による統治から逃れてきたことを論じている。評者はかつて、そのようなアジアの山間部で見られた集団は、東南アジアの沿海部にも同様に存在してきたことを試論として展開したことがある（鈴木 2016）。本書を読み進めるなかで、「水のゾミア（スコットは原著で *watery Zomia* と呼んでいる（Scott 2009: xiv)）」は東南アジアだけでなく東アジアをも含めて考えるべきだと思いついた。

ゾミア論では、山地民は次第に低地へと移動して定住生活を送り始め、マジョリティと言語的にも文化的にも同化するようになるという物語がある一方、平地民（低地に定住する人々）が自らの意思で国家の中心から離れた山間部で暮らすようになるという、もう一つの物語の可能性が示されている。この視点は、水上の船に住まいながら移動を続けていた人たちが、歴史の流れとともに陸上の家屋で定住生活を営むようになるという物語とは別の物語があることを我々に気づかせてくれる。著者が連家船漁民を対象にして明らかにしたことは、集団化政策後に多くの人々が陸上に家屋を獲得するようになったが、それでもなお船に乗って移動を常態としている事実である。山地と低地の間を跨境しながら移動と定住を繰り返すゾミアの民の術は、水上と陸上の間を縫うようにして生きる連家船漁民の住まい方と重なってみえる。

ゾミアの山地民と連家船漁民との間に確認できる類似点で、評者が最も関心を寄せたのは、彼らの文字記録に対する態度である。ゾミアの民は筆記と文書を欠如させることで歴史や系譜の面で自由となっていたこと（スコット 2013 (2009): 222）、その一方で口承文化を持つことで、長い時間の流れのなかで来歴の内容や強調点を変化させながら、利害関係に基づく集団史の戦略的再調整を可能にしてきたこと（スコット 2013 (2009): 232）が指摘されている。連家船漁民も同様に、「文字記録（族譜・位牌・墓碑）を有さず、自らの祖先にかかわる詳細な来歴を記憶することができぬ一方で、自らを農村出身者であると明確に主張することが可能」（p. 235）となっていること、また「死者の属性を後代まで固定化させる媒体としての文字記録を欠き、文字記録の束縛から自由であることによって、多様な死者を祖公に取り込むことが可能となっている」（p. 372）ことが明らかにされている。つまり、文字記録を持たないために個人ないし集団の来歴の操作が可能となっており、自らの帰属意識をその時々状況に応じて変化させることができるのである。国家の中心に暮らすマジョリティが取る歴史化の方法を、あえてその社会の周縁に陣取ることで避けることが可能となっている。

以上のように、ゾミアの民と連家船漁民を同列に並べて論じることに多少の無理がある

のは承知している。スコットが『ゾミア』のなかで論じた山地民世界は第二次世界大戦前までの話である。また、ゾミアの民の特性を普遍的なものとして措定した上で、連家船漁民の日常実践の断片をそれに当てはめて拡大解釈している面があるのは否めない。スコットのゾミア論は思弁的であり、理論ありきの類推的想像力によって歴史的叙述がなされている側面が強い(今村 2016: 280-281)。他方で本書は著者の綿密な現地調査に基づき、現地住民と顔をつき合わせ続けたなかで得られたデータによって論じられており、極めて実証的である。スコットの著した『ゾミア』と本書の間の類似性を過度に強調することは、思弁的研究が導き出した論理のなかに実証的研究を埋没させることにならないのか、そのような批判が起こりうると想像できる。たしかに、思弁的研究と実証的研究には間隙があり、その隙間を類似性のみで埋めることには困難があろう。しかし、それでも二つの性格の異なる研究をあえて並置させて考察することは、実証的研究の理論化を視野に入れる上で、有意義な試みであると評者は考えている。実証的研究の積み重ねの上で導き出される理論が重要であることは論を俟たない。評者はそのような「正統的理論化」とは別に、「異端的理論化」の道が残されていても良いと考えている。特にスコットのゾミア論のような挑発的な仮説には、実証的研究をつき合わせて検証する価値が十分にあると信じている。

上記のような評者の観点に立てば、本書と『ゾミア』から、「仮住」と「戦略的周縁化」という特徴を見出し、定住と移動、中心と周縁という二項対立的図式を脱構築することが可能ではないだろうか。スコットと著者が取り上げたのは、どちらも国家の周縁で移動するマイノリティである。彼らの研究が成し得たのは、国家の中心に居座り定住するマジョリティの歴史や生活文化を相対化することであった。当然視されてきた歴史や多数が共有する生活文化を周縁から逆照射する二つの試みは、人類が必ずしも定住や移動の片方のみで行動してきたわけではないこと、そして必ずしも中心と周縁が単一方向に働く力関係によっては成り立たないことを我々に教えてくれている。その意味で本書は、中国地域や船上居住民を専門とする研究者だけでなく、幅広い研究者に読まれるべき民族誌なのである。

参考文献

今村 真央

2016 「東南アジア山地研究は地域研究として成り立つのか？」『東南アジア研究』53巻2号: 279-286。

スコット, ジェームズ・C

2013(2009) 『ゾミア——脱国家の世界史』、佐藤仁監訳、みすず書房。(*The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.)

鈴木 佑記

2016 「水のゾミア試論——東南アジアの海民を事例として」『東南アジア研究』54巻1号: 117-126。